

食道カンジダ症

Q：食道カンジダ症とはこういった病気ですか？

A：食道の感染症で免疫機能の低下など全身状態が低下した時に発症します。

食道カンジダ症

いろいろなカンジダ種を起炎菌とする感染症で、食道の感染症の中では多い病気で、免疫機能の低下など全身状態が低下した時に発症します。

わが国では、上部消化管内視鏡検査を行った症例の1%前後に見られる頻度の高い消化管感染症の1つです。

食道カンジダ症は、HIV感染症や、悪性腫瘍、糖尿病、血液疾患などの免疫機能低下を引き起こす基礎疾患を有する患者で日和見感染として知られています。また、ステロイドや抗菌薬、H₂-ブロッカー、プロトンポンプ阻害薬(PPI)などの薬剤も誘因となります。一方、実際の臨床では基礎疾患がなくリスクとなる薬剤内服のない健常成人での症例も認められています。

診 断

診断の標準は内視鏡で食道粘膜の白苔の確認と白苔培養でカンジダを証明することです。しかし発症リスクとなり免疫不全状態と視診で明らかな口腔カンジダ症があり、さらに食道炎の症状がある場合は、内視鏡検査を省略して食道カンジダ症として治療を考慮されることもあります。

症 状

自覚症状としては、咽頭や胸部の違和感や嚥下時痛、心窩部痛、嘔気、嘔吐などがありますが、まったく自覚症状を認めず内視鏡検査で偶然に発見されることも少なくありません。

重症度の評価には Kodsí らの重症度分類(表1)が参考となります。

表1 Kodsí らの食道カンジダ症の重症度分類

Grade I	2 mm以下の白色栓が少数散在。 粘膜充血を伴うが、浮腫や潰瘍なし
Grade II	2 mm以上の白色栓が多発散在。 粘膜充血、浮腫を伴うが、潰瘍なし
Grade III	直線上に癒合し、塊化した白苔。 粘膜充血や著名な潰瘍を伴う
Grade IV	Grade IIIの特徴を有し、粘膜の脆弱化や内腔の狭窄を呈することがある

文献2)より

通常、Grade I の多くは治療を要しません。

II～IVは出血や狭窄などの合併症を考慮し、治療を検討します。

Grade I に該当する軽症例では自然軽快することもあります。病態が進行し、重症化すると、消化管内でカンジダが過剰増殖し所属リンパ節などを經由して血液中に侵入し、カンジダによる真菌血症を引き起こします。さらに全身に増殖し、播種性カンジダ症となる可能性があります。

重症化リスクとなりうる基礎疾患・臨床背景がないか患者背景を十分に検討し、重症化するリスクがないか評価し、治療方針を決めることが大切です。

治療

治療は抗真菌薬の全身投与が必要で、国内外ともにフルコナゾール内服を選択することが多いでしょう。(表2)

表2 食道カンジダ症治療におけるガイドライン比較

IDSA(米国感染症学会)カンジダ症治療ガイドライン2009年

治療期間 14～21日間	フルコナゾール 200～400mg (3～6 mg/kg) 1日1回 内服
	フルコナゾール注射 400mg (6 mg/kg) 1日1回 点滴静注
	アムホテリシンB注射 0.3～0.7mg/kg 1日1回 点滴静注
フルコナゾール難治例 治療期間 14～21日間	イトラコナゾール内用液 200mg 1日1回 内服
	ボサコナゾール懸濁液 400mg 1日2回 内服
	ポリコナゾール 200mg 1日2回 内服または点滴静注
代替薬 治療期間 14～21日間	ミカファンギン 150mg 1日1回 点滴静注
	カスポファンギン 50mg 1日1回 点滴静注
	アニデュラファンギン 200mg 1日1回 点滴静注
	アムホテリシンB注射 0.3～0.7mg/kg 1日1回 点滴静注

日本医真菌学会：侵襲性カンジダ症の診断・治療ガイドライン2013年

第一選択 治療期間 14～21日間	フルコナゾール 200～400mg (3～6 mg/kg) 1日1回 内服
	フルコナゾール注射 400mg 1日1回 点滴静注
代替薬 治療期間 14～21日間	ミカファンギン 150mg 1日1回 点滴静注
	カスポファンギン 50mg 1日1回 点滴静注
	ポリコナゾール 200mg 1日2回 内服
	ポリコナゾール注射 50mg 1日2回 点滴静注
	アムホテリシンB注射 0.5～1.0mg/kg 1日1回 点滴静注
	リボソーマルアムホテリシンB注射 2.5～5.0mg/kg 1日1回 点滴静注
	イトラコナゾールカプセル 200mg 1日1回 内服

文献1)より

食事療法としてはカンジダ菌の発育を増殖する糖分の過剰摂取を控えるなどの注意が必要です。また就寝前の歯磨き、歯ブラシの交換、義歯の消毒などの口腔ケアも大切です。

【 参考文献 】

- 1) 大場 雄一郎, medicina, Vol.53, No.7, p.1026 2016-6
- 2) 日本医事新報, No.4802, p.63, 2016.5.7